

【整理と鑑賞】

精選日本文学史

林 和利/小林幸夫 編著



桐原書店

【編著者】

林 和利（名古屋女子大学教授）〈上代～近世〉

小林幸夫（宇都宮大学助教授）〈近代〉

今野 哲〈執筆協力〉

【写真提供・協力者】（敬称略）

朝日新聞社 宮内庁 京都国立博物館 京都国立近代美術館
共同通信社 日本近代文学館 金沢文庫 五島美術館 国立劇場
国立公文書館 国立国会図書館 榊原和夫 小林古径保存会
神宮文庫 誠心院 石山寺 前田育徳会尊経閣文庫 早稲田大学図書館
早稲田大学演劇博物館 大倉文化財団 大通寺 丹治事務所
鳥取県庁 天理大学図書館 大映 東京国立博物館 東宝
東洋文庫 藤田美術館 徳川美術館 本居宣長記念館
林原美術館 義仲寺 毎日新聞社 ベンタックスギャラリー
— 東京大学明治新聞雑誌文庫 文学座 松竹 神奈川県立博物館
安田いと 増田正造

札幌 (011) 865-9610	大阪 (06) 334-3703
仙台 (022) 223-2815	神戸 (078) 331-8622
大宮 (048) 688-2121	広島 (082) 252-2112
東京 (0423) 95-6700	福岡 (092) 572-6543
長野 (026) 295-0645	沖縄 (098) 854-1620
名古屋 (052) 704-8036	

整理と鑑賞 精選日本文学史

1994年2月1日 初版発行

発行者 小 島 昌 光

1996年12月1日 第 6 刷

印刷所 株式会社桐原コム

製本所 株式会社越後堂製本

発行所 株式会社 **桐原書店** 東京都杉並区高円寺南2-44-5 (〒166)
振替 00160-1-55244 電話 (03)3314-8181

表紙デザイン 鈴木堯 ダイアグラム 芳賀正晴

乱丁・落丁本は本社でお取替いたします。

【整理と鑑賞】

精選日本文学史

林 和利/小林幸夫 編著

江苏工业学院图书馆
藏书章

桐原書店

日本の文学は、古代から現代に至るまで多くの作品が生まれており、質・量ともに豊富な内容をもっています。また、伝統を継承しつつも新しい時代を反映した文学が形成されてきましたから、その流れの変化は複雑で多彩です。文学史はそれを系統的に整理し、時代を追って眺めようとするものです。個々の作品について詳しく学ぶことも大切ですが、流れや全容を知ること重要ですから、文学史の学習はそのために役立ちます。

しかし、あまりにも多くのことを学ばなければならない高校生や大学受験生にとって、文学史のために多くの時間をあてるのはむずかしいことでしょう。そこで、なるべく簡便で、なるべくわかりやすく、しかも必要にして十分な内容を盛り込んだ学習書が必要になってきます。本書は、その要求を満たすことを基本方針として執筆しました。

そのために簡にして要を得た説明を心がけ、むずかしいこともやさしい言葉で表現するように努めました。また、図解や写真も豊富に用いて、視覚的に理解できるように工夫してあります。特に図解は一目瞭然の効果がありますので、大いに活用して下さい。脚注には新しい学説なども含んだ詳しい情報が記されており、レベルの高い学習も可能です。

さらに、本書の大きな特長は、鑑賞のページが設けられていることです。文学史が単に知識の羅列に終わらず、実感を伴った学習効果が上がることを期待して、重要な作品の本文を抜粋して収録しました。なるべく高校生が読んでもおもしろい箇所を選んだつもりです。鑑賞の手ほどきを示し、古典の場合は現代語訳も付けてありますので、文学のおもしろさを味わいながら学ぶことができます。

本書が皆さんの学習に役立ち、ひいては日本の豊かな文学世界へいざなうことができば、うれしく思います。

鑑賞 おくのほそ道 炭俵

和歌・漢詩文・国学・儒学……………82

鑑賞 源氏物語玉の小櫛 折たく柴の記

【劇文学】浄瑠璃・歌舞伎……………84

鑑賞 曾根崎心中

〈近世の文学〉一問一答総チェック……………86

近代の文学 近代とは……………88

【小説】幕末から明治へ―啓蒙期の文学……………92

鑑賞 安愚楽鍋

近代文学の出発①―写実主義と浪漫主義Ⅰ……………94

鑑賞 浮雲

近代文学の出発②―写実主義と浪漫主義Ⅱ……………96

鑑賞 金色夜叉

近代文学の模索―写実主義と浪漫主義Ⅲ……………98

鑑賞 たけくらべ

近代文学の成立①―自然主義……………100

鑑賞 蒲団

近代文学の成立②―漱石と鷗外……………102

鑑賞 こころ

近代文学の成立③―耽美主義の文学……………104

鑑賞 刺青

近代文学の展開①―白樺派の文学……………106

鑑賞 城の崎にて

近代文学の展開②―新思潮派……………108

鑑賞 奉教人の死

近代文学の転換①―プロレタリア文学……………110

鑑賞 蟹工船

近代文学の転換②―新感覚派……………112

鑑賞 春は馬車に乗って

近代文学の転換③―芸術派……………114

鑑賞 檸檬

近代文学の成熟①―転向文学・既成作家……………116

鑑賞 夜明け前

近代文学の成熟②―新人と戦時下……………118

鑑賞 山月記

戦後文学の出発①―新戯作派・既成作家……………120

鑑賞 斜陽

戦後文学の出発②―戦後派……………122

鑑賞 金閣寺

戦後文学の変容①―第三の新人……………124

鑑賞 死者の奢り

戦後文学の変容②―内向の世代……………126

鑑賞 杏子

現代の文学……………128

鑑賞 ノルウェイの森

戦後の評論……………130

鑑賞 日本近代文学の起源

【詩歌劇文学】 近代詩の出発……………132

鑑賞 初恋……………134

象徴詩の時代……………134

鑑賞 茉莉花 片恋……………136

近代詩の達成……………136

鑑賞 冬が来た 猫……………138

現代詩の出発と展開……………140

鑑賞 郷愁 汚れつちまった悲しみに……………142

戦後詩……………142

鑑賞 四千の日と夜 かなしみ……………144

短歌の革新と近代化……………144

鑑賞 正岡子規 与謝野晶子 石川啄木……………146

現代短歌への展開……………146

鑑賞 斎藤茂吉 斎藤史 塚本邦雄 俵万智……………148

俳句の革新と近代化／現代俳句……………148

鑑賞 高浜虚子 山口誓子 西東三鬼……………150

高柳重信 坪内稔典……………150

近・現代劇文学の成立と展開……………153

鑑賞 夕鶴 マッチ売りの少女……………154

〈近代の文学〉 一問一答総チェック……………154

鑑賞 一問一答総チェック解答……………154

録 古典文学史年表……………160

付 近代文学史年表……………166

さくいん……………166

本書の構成と利用法

【時代区分】 本書の時代区分は、上代（大和・奈良）・中古（平安・中世（鎌倉・室町）・近世（江戸）・近代（明治））の五つの区分によりました。

【概観】 各時代の冒頭には「○○とは」というページを設け、その時代の大きな流れと特色を簡潔に解説し、時代を俯瞰できる展開図を配しました。

【本文】 文学の流れをジャンルごとに解説します。解説は難解な用語を極力避けて簡潔にまとめ、重要事項は太字にしました。また、解説の理解を助け、知識を整理できるできるように、そのジャンルのポイントをすべて図式にまとめました。さらに、重要作品は鑑賞として作品を引用し、解説をほどこしました。実際の作品に直接触れることが、文学史の真の理解につながるからです。なお、本文中*のついている項目は、脚注に補足解説があります。

【一問一答総チェック】 各時代の末尾には、一問一答形式のチェック問題を付しました。これは単に知識を問うのが目的ではなく、本文の理解度をチェックし、整理するためのものです。わからないところは参照ページに戻って、もう一度本文を読み直してください。

【年表】 ジャンルごとに作品を整理し直し、本文中に解説のあるものは太字にしました。

【年数表記】 本文中は原則的に西暦と年号を並記し、脚注では理解しやすいよう西暦だけの表示にとどめました。近代では年号で表記する習慣が強いため、脚注の作品成立年度は年号による表記としました。

上代の文学



上代とは

文学の発生から平安京遷都までを上代といいます。

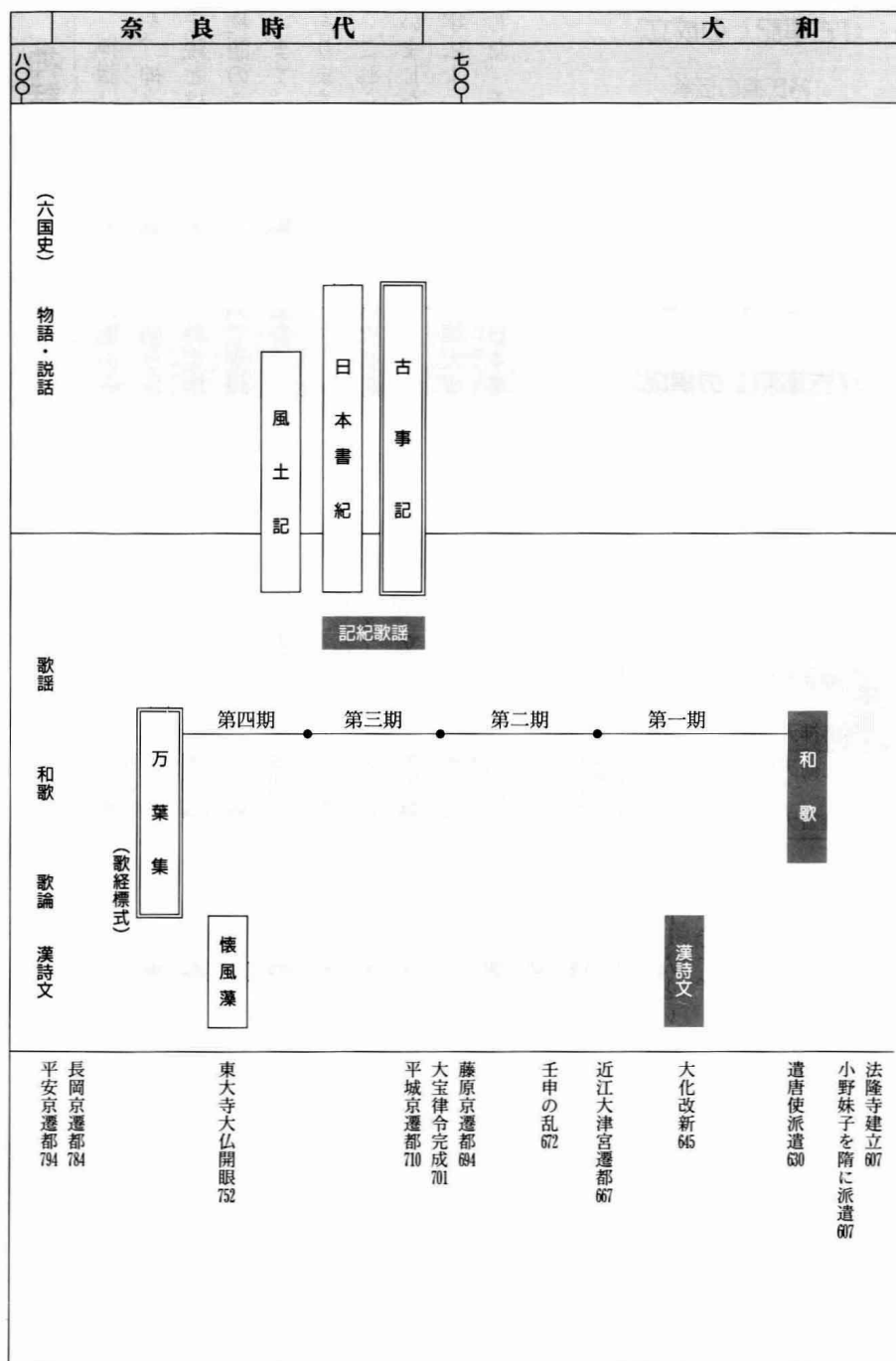
狩猟や植物採取によって生活をしてきた縄文時代から、農耕を中心とする弥生時代への移行は画期的なことでした。人々は農耕を通じて自然との関係を深め、その結果、自然を司る「神」との交渉が、共同体にとって極めて重要な意味をもつようになったのです。神への祈りや神々の働きを人々は語り伝え、謡い継いで伝承しました。こうして生まれたのが、神話や伝説、歌謡などの口承文学です。

やがて、大和朝廷が統一国家を形成し、大陸から漢字が伝来すると、それまでの口承文学を記載することができるようになりました。国家が強大化するに伴い、国家的な規

模で自らの国家の拠り所を記述しようという機運も起こります。とりわけ、壬申の乱によって権力の頂点に立った天武天皇は、神話や伝説をもとにして、天皇家の正統性を盛り込んだ歴史書の編纂を企てました。この試みは、奈良時代になって、『古事記』『日本書紀』として実を結びます。

一方、祭の歌などから発展した歌謡は、地位の高低、老若男女を問わず多くの人々に謡われ、その中から和歌が生まれました。歌謡の一部は『古事記』『日本書紀』にも記載されていますが、奈良時代後半に和歌を中心に編纂された『万葉集』には、天皇から庶民にいたる様々な階層の人々の歌が数多く収められ、今も読む人の心を打ちます。

時代				時代
時	代	四世紀	五世紀	六世紀
六〇〇				
				西暦
				物 語
				神話・伝説
				詩
				歌
				歌謡
				歌
				歴史事項
				大和朝廷の統一
				巨大古墳築造
				漢字伝来
				仏教伝来
				聖徳太子摂政となる
				聖徳太子摂政となる

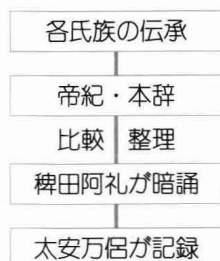


神話・伝説

神話は、古代の人々が天地の成り立ちや自然現象などを、神々による行為として語り伝えたものです。また、伝説とは、歴史上の人物や特定地域の自然物についての物語のことをさし、娯楽的で空想的な昔話とは区別しています。神話・伝説・昔話を総称して説話ということもあります。

これらの話を、古代の人々は口から口へと語り伝えていましたが、大陸から漢字が伝えられたことにより、文字によって書き留められ、集大成された作品が生まれました。それが、『古事記』『日本書紀』『風土記』です。

『古事記』の成立



『古事記』の構成

上巻	天地創造 イザナギとイザナミの 国作り 天の岩戸(岩屋戸) ヤマタノオロチ オオクニヌシノミコト の国譲り 天孫降臨 海幸・山幸など	神話
中巻	神武天皇 … 応神天皇	伝説
下巻	仁徳天皇 … 推古天皇	

古事記

『古事記』は、上中下三巻から成る日本最古の歴史書で、その中に多くの神話・伝説が記されています。

*じんしん 壬申の乱で勝利を収めた天武天皇は、天皇中心の統一国家にふさわしい歴史書を作るべきだと考えました。そこで、各氏族が伝えていた神話・伝説の類(*ていぎ 帝紀・本辞)を整理し直して稗田阿礼(*ひえだのあれ)に暗誦させましたが、天武天皇の死去もあって完成には至りませんでした。その後、元明天皇が、阿礼の暗誦していたものを太安万侶(*おののやすまろ)に命じて編纂筆録させ、七一二(和銅五)年に完成したのが『古事記』です。

『古事記』の本文は漢字の音と訓を交えた変則の漢文体で記されていますが、それは古代の日本語を書き表すために工夫した結果です。つまり、日本語を初めて文字化し、文章化したという点でも大きな価値があるわけです。

上巻は神代(*じんだい)の巻とも呼ばれ、天地創造から神武天皇(*じんむ)の誕生までが神話を中心に描かれています。イザナギとイザナミによる国作り、天孫(*てんそん) (ニニギノミコト)の

天降り、スサノオノミコトのヤマトノオロチ退治、オオクニヌシノミコトの話、海幸・山幸の話などはよく知られています。

また、中巻は神武天皇から応神天皇まで、下巻は仁徳天皇から推古天皇まで、それぞれ天皇一代ごとの系譜を中心にした伝説的な物語が収められています。これらの中には、恋愛や嫉妬を描いた話もあり、人間味あふれる心情の描写が見られます。

全体的に見て、『古事記』は古代史を背景にした壮大な叙事詩的物語であるといえましょう。

日本書紀

奈良時代から平安時代前期にかけて朝廷が編纂した正式な歴史書が六つあり、それを六国史と言います。先進国中国の『史記』や『漢書』にあたる正史を作ろうとしたもので、『日本書紀』はその最初のもので、^{＊とねりしんのう}舎人親王が元正天皇の命令を受けて編纂にあたり、七二〇（養老四）年に完成しています。

全部で三十巻から成っており、巻二までが神代で、巻三以下は神武天皇から持統天皇までのことが編年体で記



大和三山(奈良県)

されています。本文は、表記も文体も純粋な漢文で記されていて、編纂者の文章能力の高さを示しています。

編纂にあたっては資料の収集が幅広く行われたようで、「一書曰」として異説や別伝を多く列挙している点に特徴があり、多いときには十一種もの別伝をあげています。その意味で歴史書としての客観性を有しており、虚構性の強い『古事記』との違いがみられます。

風土記

『古事記』が完成した翌年にあたる七三二（和銅六）年、朝廷は諸国に対して、地名の由来や産物のリストおよび各地の伝承を報告するように命じました。それに応じて諸国から提出された報告書が『風土記』です。

それぞれの地方に伝承された神話・伝説が、あまり政治的意図にとらわれずに記されていますので、『古事記』が伝える神話・伝説と大きく異なる場合もあります。当時の人々の生活や心情がそのまま反映していて、民俗研究の資料としての価値も認められます。

祝詞・宣命

祭儀において神に祈る言葉を祝詞と言います。言葉の霊力を信じた古代の言霊信仰に際しては、天皇から宣命が発せられました。

『古事記』に収められた神話・伝説の中で、おそらく最もポピュラー

神話の地
白東海岸

海^{うみ}の和^わ邇^にを欺^{あざむ}きて言^いひしく、「吾^{われ}と汝^{なんぢ}と競^{せう}べて、族^{うぐさ}の多^{おほ}き少^{すく}きを計^{かぞ}へてむ。故^{ゆゑ}汝^{なんぢ}は其^その族^{うぐさ}の在^あり^{まゝ}の隨^{したが}ひに、悉^{ことごと}く率^{りつ}て来^こて、此^{こゝ}の島^{しま}より氣^き多^たの前^{まえ}まで、皆^{みな}列^りみ伏^ふし度^どれ。爾^{こゝろ}に吾^{われ}其^{その}の上^{うへ}を踏^ふみて、走^{はし}りつゝ読^よみ度^どらむ」(中略)吾^{われ}其^{その}の上^{うへ}を踏^ふみて、読^よみ度^どり来^こて、今^{いま}地^ちに下^{くだ}りむとせし時^{とき}、吾^{われ}云^いひしく、「汝^{なんぢ}は我^{われ}に欺^{あざむ}かえつ」と言^いひ竟^はるはる即^{すなは}ち、最^{さい}端^{たん}に伏^ふせし和^わ邇^に、我^{われ}を捕^{とら}へて悉^{ことごと}く我^{われ}が衣^え服^{ふく}を剥^はぎき。

「私に口ウサギは、海のワニ（サメ）をだしてどう言いました。私の同族とおまえの同族とどちらが多いか。数えてみようではないか。おまえは同族をみんなひきつれてきて、この島から気多の崎まで並んで槽になってもらん。そうすれば私はその上を踏んで走りながら数えて渡ってみよう」（中略）私は、その上を踏んで数えて渡り、もうすぐ陸地に下りようとするとき、私は「おまえは私にたまさかれたんだよ」と言いました。言ひ終わるやいなや、一番端に横になっていたサメが私をよかまえて、私の着物をすべてはきどつてしまったのです。

擬人化されたウサギの語り口には、おとぎ話のようなおもしろさがあります。このような文芸性が『古事記』の特徴であり、またそれが魅力ともなっています。

壬申の乱。天智天皇の子（大友皇子）と同天皇の弟（大海人皇子）のち天武天皇の間で起こつた皇位継承の争ひ。その年が六七二年、すなわち壬申（みづのえさる）の年だつた。帝紀・本辭。『帝紀』は皇位継承のことや皇室の系譜を記したもので、『本辭』は皇室や諸氏族に伝えられた伝説、歴史を記したもので、どちらもうゑて見えない。稗田阿礼。生没年未詳。天武天皇の舍人。記憶力にすぐれ、十八歳の時、天皇から帝紀と本辭の暗誦を命じられた。性別は未詳で男女両説ある。

太安万侶。〇七三。奈良時代の官人。博士で知られ、『古事記』だけでなく、『日本書紀』の編纂にも関係したと伝えられる。一九七九年、奈良市此瀬町から安万侶の墓誌が出土して話題となつた。

『古事記』の文体。和製漢文に万葉仮名をまぜて、漢字を日本式に用いる工夫が施されている。たとえば「如浮脂而（浮かべる脂の如くして）久羅下那州（クラゲなす）の場合、前半が和製漢文、後半が万葉仮名である。

[illegible]

12

鑑賞
常陸国風土記

『風土記』に収録された各地の伝承によつて、その地方

の人々の生活ぶりをうかがうことができます。たとえば、古代には歌垣（「かがい」ともいう）といつて、若い男女がある場所に集まり、謡ひ踊つて遊びながら結婚相手を見つけるといふ習俗がありました。筑波山も歌垣が催された所ですが、次の文はそれについて記載した箇所です。



筑波山（茨城県）

其の筑波の岳は、往集ひて歌ひ舞ひ飲み
突ふこと、今に至るまで絶えざるなり。
（中略）相携ひ駢聞り、飲物を齎齎て、騎
にも歩にも登臨り、遊樂しみ嬉違ぶ。其
の唱にいはいく、
筑波嶺に逢はむといひし子は 誰が
言聞けば 神嶺 あすばけむ

その筑波山は、皆が集まり歌舞や飲食をして遊ぶことが、昔から今に至るまで絶えたことがない。（中略）多数連れ立って飲食物を持参し、ある者は馬で、ある者は徒歩で登って遊び楽しむ。その歌の文句は、筑波山（の歌垣）で逢おうと言ったあの娘は、誰のプロポーズを聞き入れて神山の遊びをしたのだから（私は逢うのを楽しみにしていたのに、彼女は逢ってくれなかった）。

このような古代習俗の叙述においても、ロマンの香りが漂ってきます。なお、『万葉集』にも「筑波嶺に登りてカガヒ（歌垣）せし日作れる歌」（高橋虫麻呂）とあります。筑波山の歌垣はよく知られた行事だったようです。

『古事記』と『日本書紀』の比較

表記	叙述態度	目的	時代	巻数	成立	編者	
漢字の音訓を交えた変則の漢文	文学的・主観的	皇室中心の国家統一（対内的）	神代・推古天皇	三巻	七二年	太安万侶 稗田阿礼	古事記
表記も文法も純粋の漢文	歴史的・客観的	日本の正史の作成（対外的）	神代・持統天皇	三〇巻	七〇年	舍人親王	日本書紀

六国史 国が正式に編纂した六つの歴史書。すべて漢文体で記されており、六編をつなぐと平安初期以前の一貫した古代史となる。『日本書紀』・『続日本紀』・『日本後紀』・『続日本後紀』・『日本文徳天皇実録』・『日本三代実録』。舎人親王 六七八〜七二五。天武天皇の皇子。『万葉集』に作歌が伝わる歌人でもあった。編年体 歴史を年月の順に従って記す形式。『風土記』もとは六十余か国の『風土記』が存在したはずだが、現存しているのは常陸（茨城県）・出雲（島根県）・豊後（大分県）など五か国のみである。

歌謡

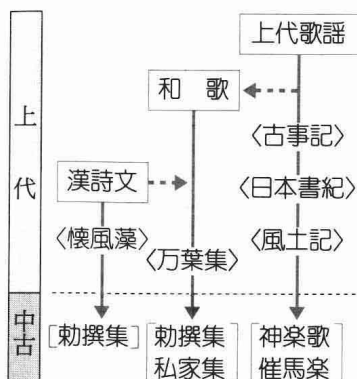
リズムとメロディをつけて謡う歌を歌謡といいます。上代の歌謡は、原始的な信仰の行事や労働作業の中で発生したもので、集団で謡われるものでした。いわば民謡にあたるものと考えればわかりやすいでしょう。上代歌謡のうち、『古事記』『日本書紀』に記されているものを記紀歌謡といいます。

記紀歌謡

歴史を書き記すにあたり、『古事記』『日本書紀』に採録された歌謡が、記紀歌謡です。

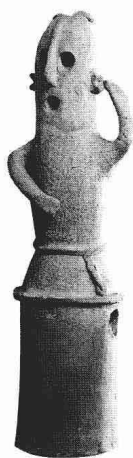
その数は、両者に重複するものを除けば、約百九十首に

〈詩歌の展開〉



〈古代の歌体〉

不定形	形式が一定でない 最も古い
片歌	五七七
旋頭歌	五七七・五七七
長歌	五七・五七…… 五七七
短歌	五七・五七七
仏足石歌体	五七五七七・七



踊る埴輪

『万葉集』より古い時代の歌謡が収められており、『万葉集』に先立つ叙情詩としての文学性を持っているところに、その価値が認められます。

なります。

記紀歌謡特有の歌体というものはありませんが、^{*}長歌・^{*}短歌・^{*}旋頭歌・^{*}仏足石歌(体)・^{*}片歌などの歌体が見られます。その中で最も多く用いられているのは短歌です。『古事記』『日本書紀』が編纂されたころには、短歌がすでに最も優勢な歌体であったことがわかります。記紀歌謡が実際に謡われたものであることは、たとえば、「御琴を授けて唱はしめ」などと記されていることから明らかです。また、「酒楽歌」「夷振の上歌」など、歌曲名とみられる名称が記されていることも、歌唱性を裏づけています。

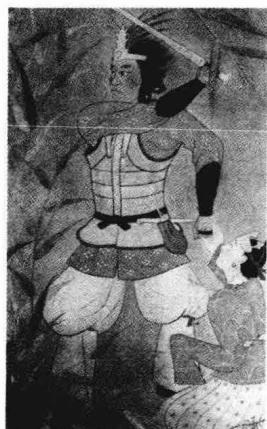
鑑賞
記紀歌謡

ヤマトタケルノミコトは東国征伐の帰途、病気に倒れ、伊勢の国（三重県）能煩野（鈴鹿郡）で亡くなりました。このとき、故郷の大和をしのんで詠んだ歌が「国思ひ歌」として『古事記』に記されています。

其れより幸行でまして、能煩野に到りま
しし時、国を思ひて歌曰ひたまひしく、
倭は 国のまほろば たたなづく 青
垣 山隠れる 倭しうるはし
とうたひたまひき。又歌曰ひたまひしく、
命の 全けむ人は 置薦 平群の山の
熊白橋が葉を 髻華に挿せ その子
どうたひたまひき。

（『古事記』中巻）

この伝説に従えば、これは望郷の歌
ということになります。おそらく前
者は国讃めの歌であり、後者は長寿を
祈る歌であって、ともに民謡としてひ
ろく歌われていたものでしょう。それ
がヤマトタケルの伝説形成の過程で採
り入れられたものとみられます。



安田穀彦画「草薙の剣」（ヤマトタケルノミコト）

そこからさらに行き進んで、能煩野に到着さ
れたとき、故郷をしのんで、
大和は実によい国だ たたみ重ねたように
青々とした垣のような 山の内に隠つて
いる 大和は美しい
と歌われた。また、
命の無事な人は 平群の山の 大きな怪の
葉を 髪にさせ その人々よ
と歌われた。

長歌 五・七を繰り返して五・七・七で終わる
のが基本的な形式。全体の句数は、七句の
ものから百四十九句に及ぶものまで様々だが、
十五句から二十五句程度のものが最も多い。
柿本人麿を筆頭に、万葉時代の有名歌人の
ほとんどが長歌を詠んでいる。

短歌 五・七・五・七・七が基本で、計二十一
文字なので「みそひともじ」ともいう。長歌
に対して用いられた称。短歌の成立事情につ
いては諸説あつて、まだ定説がない。記紀歌
謡の約半数が短歌形式であることから、歌体
としてはすでに成立していたことがうかがえ
る。『万葉集』になると約九割が短歌で占めら
れており、以後、和歌の中心的存在となる。
旋頭歌 五・七・七・五・七・七の六句の歌。
最初に三句を歌い、一度休止して頭をめづら
すようにあとの三句を歌うところから名付け
られたものと考えられている。歌垣の誘ひ歌、
集団の笑い歌など民謡的なものから、個人的
な悲しみを詠んだものまであつて、多様性が
うかがえる。

仏足石歌体 五・七・五・七・七・七の形で、
短歌形式の末句にもうひとつ七言句が付け加
わったもの。奈良薬師寺に現存する仏足石（釈
迦如来の足跡を刻んだ石）を礼賛する歌がこ
の形式になっていることから名付けられた。
仏足石歌体は歌われる歌謡としての歌体であ
つたものと考えられている。

片歌 五・七・七の三句から成る。多くの場合、
問答体の一方の歌である。